

# 三毛の作品「欧州に赴く途中の見聞録」に関する覚書

李 丹 丹

キーワード：三毛 「欧州に赴く途中の見聞録」 創作中期 人物像 作者三毛  
自身の経験

台湾女流作家三毛（1945年～1991年）は、20世紀70年代と80年代に中国語圏で最も活躍した作家の一人である。その作品の作風や内容などの違いによって、三毛の創作時期は、初期（1962年～1967年）、中期（1973年～1979年）、後期（1980年～1991年）の三期に分けられる。

初期の作品は、当時台湾文壇で流行していたモダニズムと作家舒凡の影響が強く見られる（前者の影響が見られるのは例えば「惑」であり、後者の影響が見られるのは例えば「ある月曜日の朝」である）。この時期の作品はほとんどフィクションであり、小説である。

創作中期に入ると三毛の作品は次第に自分なりの作風に定着した。この時期の作品にはいくつかの特徴が現れている。

① すべての作品の主人公は「私」であり、その「私」の名前は作者のペンネーム三毛である（創作中期の最初の作品「欧州に赴く途中の見聞録」では、主人公「私」の名前は作者の本名「陳」と「三毛」の両方が使われている。また、「私」の名前が明示されない作品もある）。

② 中期作品では、どの主人公「私」（「三毛」）も同じような性格や性質を持っている。そのため中期作品はまるでシリーズドラマのようになっている。

③ この時期の作品は作者の経歴と深く関わっており、実在した人物がしばしば作品に登場する。

以上の三つの特徴によって、三毛の中期作品は読者に非常にリアリスティックな印象を与える。

「欧州に赴く途中の見聞録」（中国語題「赴歐旅途見聞録」）は創作中期の最初の作品であり、主人公「私」が香港、ロンドンを経由してスペインに行く途中のハプニングを描いている。当作品は雑誌『実業世界』<sup>①</sup> 1973年11月号に掲載され、当作品で三毛というペンネームが初めて使われた。字数は約1万4千字であり、小見出し14個を使って本文を15部分に区切っている。これ

はおそらく作者が作品を発表する雑誌の性格に合わせ、読者が読みやすいようにするための工夫であろう。同じ書き方がほぼ同じ時期に『実業世界』に掲載されたほかの二篇の作品——「私は台湾から飛翔した」（原題「我從台灣起飛」、1974年1月発表）、「船を沈ませた人が黄鶴楼を見上げる」（原題「翻船人看黄鶴樓」、1974年4月発表）——にも使われている。

「欧州に赴く途中の見聞録」は三毛の創作中期の最初の作品であるが、中期作品の特徴を垣間見ることができる。以下の二つの面から具体的に見てみよう。

## 一 主人公「私」（「三毛」）の人物像

先にも述べたように、中期創作のほぼすべての作品の主人公は、第一人称の「私」（「三毛」）である。そして、各作品のストーリーは異なるが、主人公「私」の性質はそれほど変りがない。この二点から、作者三毛はすべての中期作品で同一人物——「私」（「三毛」）を描き続けていると言える。したがって、この「私」が、どのような人物なのかが重要になってくる。

以下「欧州に赴く途中の見聞録」の主人公「三毛」の人物像を次の三点に即して考察することにする。

### 1 他人への思いやりが深く、そして他人に敬愛される「私」

「欧州に赴く途中の見聞録」では、「私」が飛行機の中で人のために三回も座席を代わってあげるといふエピソードが描かれている。「ある兄弟と一緒に座りたいといふので代わってあげた。次いで家族連れが来たので私はまた代わってあげた。次に今度は学生のグループと一緒に座りたいといふのでもう一度代わってあげた」<sup>②</sup>。座席を三回も代えるといふのは言うまでもなく実に面倒なことであるが、「私」が全くそうは思っていないようである。「幸い私は一人だから、飛行機の中で『大きな引越し』をしても面倒ではない。（おかしなことがあった。何人かの若者が一人で旅行していたが、ほかの人からの座席を替えて欲しいとの要望に彼らはどうしても応じなかった。こんなことは私には到底理解できない。）他人に便宜を図りつつ、自分も全く損をしないことをどうして進んでしようとししないのか？」<sup>③</sup>

また、「私」が乗った香港発ロンドン行き飛行機に李というお婆さんがいた。このお婆さんは英語はもちろん、国語（中国語）も広東語もできなく、故郷寧波の方言しかできない。彼女は乗り換えのため、飛行場の異なるチケットを二枚持っており、ドイツ行き飛行機のチケットの出発時間はまだ未定だった。そんな彼女に「心配なさらないで。私も寧波人で、私も同じ飛行場に乗り継ぎに行きますので、ついて来てください」<sup>④</sup>と話しかけ、ロンドンまでずっと世話

を焼き続けた。自分はイギリスに入国させて貰えないだろうと思った時、「私は英文でメモを書きますから、あなたはそれを持っていれば、きっと助けてくれる人がいる筈です。心配しないでください」<sup>⑤</sup> と彼女のために周到に考えてあげた。さらに、自分がイギリスに入国させて貰えたと思った時、すぐに李お婆さんのことを思い出し、人ごみの中から彼女の姿を探した。

そのほかに、「私」は拘置所に拘置されている人にコーヒーを淹れてあげたり、持っているすべてのタバコを分けてあげたりした。

一方、「私」がたくさんの人に敬愛されているということも読み取ることができる。飛行機の中で出来た友達からは、先に行く時に声をかけて貰った。「さよなら、さよなら。順調に通れるようにと祈っているよ」<sup>⑥</sup>。

また「私」は、イギリスの警官マリアとローリーに優しく接してもらった。拘置所の中で食事が出るにもかかわらず、マリアは食事に誘ってくれた。「私」はその誘いに乗らなかったが、マリアは私のためにわざわざ焼きレバーを買ってきてくれた。警官ローリーは、他の警官に内緒で、「私」に「私」の知り合いの弁護士に電話をかけさせてくれた。そして、知り合いの弁護士がイギリスにいないということを知って、失望の余り立っている力さえ失った「私」にこう励ます。「急ぎましょう、手を貸しますから帰りましょう。がっかりしないでください。移民係にはあなたが病気だと言います、そうすれば彼らは早目にあなたを解放するかもしれません」<sup>⑦</sup> と。ローリーが「私」と別れる時、作者は次のように書いた。

「それを聞いてローリーは大笑いした。それから、ああと溜息をつくと、私のほうを見続けた。暫くしてから手を伸ばしてきて言った。“さようなら。今日は実に楽しかったです。手紙をください！体を大切にしてください。”そして私の髪の毛を軽く引っ張ってから、笑いながら去って行った」<sup>⑧</sup>。

ローリーの「私」に対する優しい気持ちが、上の引用文からもはっきり読んで取れる。

また、最初「私」をイギリスに入国させてくれなかった移民係の係官は、後で「私」の反論を聞くと、「私」と握手し、勇気のある女の子だと褒めてくれた。

「欧州に赴く途中の見聞録」の主人公「三毛」の、できるだけ人を助け、「自分」も数多くの人に敬愛されているという特質は、中期の他の作品に於ても同じである。

## 2 聡明で、才能と勇気がある「私」

まず、主人公の「三毛」は聡明な人である。自分の無実を弁明する時の台詞から、「私」が豊富な法律の知識を持っていること、考えが細かく、論理的であることがよく分かる。拘置所の警官に台湾では外国の連続ドラマが放映されて

いるかと聞かれた時、「私」は「放映されていますよ、：《復讐者》と云います」と掛け言葉を使って答える。また作品の最後で「私」がイギリスを虎に、自分を豚にそれぞれ例えた上で、結局豚が虎を食べてしまった、と実に面白く、興味深い例えをする。ここからも「三毛」の頭の働きの鋭敏さとユーモア的な性質を窺い知ることができる。

「私」は豊かな才能の持ち主である。言葉について言うと、「私」は国語（中国語）以外英語、スペイン語、寧波方言が話せる（他の作品ではさらにドイツ語、日本語、台湾方言も話せる）。英語のレベルはイギリス人と論争できるくらいである。絵について言うと「私」は拘置所でクレヨンを渡されると、さらさらと描くとルオー<sup>9</sup> 張りのタッチで泣き顔を描き上げる。

「三毛」は不公平なことに遭ったら、それを大胆に指摘する勇気を持っている。例えば、「私」が拘置所に入れられた時、静かに泣いている他の中国人の女の子たちと違って、何回も警官に自分に対する不公平な待遇を抗議した。また、移民局の係官が今から判決を下すと言った時、「私」は緊張と怒りの果てにこう言った。「私は立ちません。そしてあなたも座って下さい。私はあなたの話を聞くのを拒否します。あなたは私に弁護士をつけてくれないので、私は自分で弁護します。このプロセスを踏んだ後でなければ、私は聞きません、去りません、私は生涯あなたたちの拘置所に住まわせて頂きます」<sup>10</sup>。その後、判決文を聞いて、「私」は大胆にもその判決の間違いを指摘した。

「三毛」が数多くの人に敬愛されるのは、進んで人を助けるためだけでなく、能力が優れていると言うためでもある。つまり「三毛」があのような優秀な女性であるから、多くの人に敬愛されることができたのである。

### 3 プラス思考で物事を考える「私」

「私」には、物事を前向きに考える性質がある。「私」が異なる空港を利用するチケットを買ったということに初めて気づいた時、最初は少し怒りを覚えたが、イギリスで七十二時間の通過査証を貰えれば、三日間ロンドン見物をしてからスペインに行くのも悪くないとすぐに、考え直した。また、拘置所に入れられたことも人生の貴重な体験としている。さらに、イギリスでひどい目に遭ったのに、「私」は自分を豚に、イギリス政府を虎に喩え、結局豚が虎を食べてしまったと言い放つ。

以上「欧州に赴く途中の見聞録」の主人公「三毛」の人物像について考察した。以上、三つの「三毛」の性質は中期作品における「三毛」のすべての性質とは言えないが、主なるものであると言えるであろう。この意味で「欧州に赴く途中の見聞録」における「三毛」像は、中期の他の作品における「三毛」像

と密接な関係にある。

## 二 「欧州に赴く途中の見聞録」に描かれたことと作者三毛自身の経験との関係

前述通り「欧州に赴く途中の見聞録」では「私」がスペインに行く途中のいくつかの出来事が描かれている。そしてそのいくつかの出来事の中で作者が力を入れて描いたのは「私」がイギリスの空港で密入国する意図があると疑われ、イギリスの移民局に起訴されたというトラブルである。「欧州に赴く途中の見聞録」で書かれたのは事実に基づいたものであろうか、それとも完全に想像したものなのであろうか。

三毛は1967年留学で最初にスペインに渡った。1970年台湾に戻り、そして1973年再びスペインへ渡った。二回目の出国途中で、あるトラブルに巻き込まれた。それについては三毛の遺著『我的靈魂騎在紙背上——三毛の書信札與私相簿』（日本語訳『私の魂は紙に跨っている』、哈爾濱出版社、2003年初版）に収集された家族宛の手紙に詳しく書かれている。手紙の日付は1973年8月20日である。この手紙の内容の概略は次のようである。

「私」がスペインに行くために、ロンドンで異なる空港の便に乗り継ぐ。しかし、空港の移民局の係官が「私」の台湾のパスポートを認めず、イギリスへ密入国する意図があると疑った。「私」は移民局の拘置所に連れて行かれ、そこで10何時間を過ごした。その後、再び空港の移民局に連れ戻され、イギリス移民局が「私」に下した判決を聞かされた。「私」はその場で自分のために弁護し、優秀（「了不起」）な女性だと褒められた。その後「私」は順調にスペインに入国し、スペイン人に暖かく迎えられた。

この手紙で語られた三毛本人の体験は、「欧州に赴く途中の見聞録」で描かれた「私」が遭った出来事と大筋はもちろん細かいところまでほぼ同じである。たとえば衆目の視線が注がれる中をパトカーに乗ったこと、父親の友人である弁護士に電話したらあいにく香港に行っていて不在であったこと、拘置所の人から焼きレバーをくれたこと等々である。

「欧州に赴く途中の見聞録」の内容を、該文が発表された30年後、三毛がこの世を去って12年後に公開された手紙と照らし合わせてみると、該文が三毛が自身の実際の体験に基づいて書いた作品であることが分かる。

### 終わりに

「欧州に赴く途中の見聞録」は、創作初期の最後の作品から6年ぶりに書いた作品である。この作品は初期の憂鬱に満ち溢れた作風から完全に脱出し、明

るく単純明快な作風に変わった。創作中期の作品は、これを初めとして徐々に注目を集めるようになった。特に後のサハラ砂漠での生活を題材にした作品集、『サハラ砂漠物語』は台湾で大ヒットした。「欧州に赴く途中の見聞録」は創作中期の代表作ではないが、創作中期の作品の特徴をよく備えた中期の最初の作品として重要な存在である。

### 使用テキスト

三毛『三毛全集 2 雨季不再來』（『三毛全集 2 雨季は二度と来ない』）（皇冠文化出版有限公司、1976年初版）

---

### 注

① 月刊、1965年5月創刊。1989年12月停刊。実業世界月刊社出版。（国家図書館[台湾]による。<http://readopac.ncl.edu.tw/cgi/ncl9/ncl9query>）

② 原文は「有的兄妹想坐在一起，我換了；又來了一家人，我又換了；又來了一群學生想坐在一起，我又換了」。

③ 原文は「好在我一個人，機上大搬家也不麻煩。（奇怪的是我看見好幾個年輕人單身旅行，別人商量換座位，他們就是不答應，這種事我很不明白。）予人方便，無損絲毫，何樂不為呢？」。

④ 原文は「你不要怕，我也是寧波人，我也要去換機，你跟住我好了」。

⑤ 原文は「我寫英文條子給你拿在手上，總有人會幫你的，不要怕」。

⑥ 原文は「再見，再見，祝你順利通過」。

⑦ 原文は「快点，我扶你回去，不要泄气，我去跟移民局讲你在生病，他们也许会提早放你」。

⑧ 原文は「勞瑞聽了大聲狂笑，一面唉唉的嘆著氣，側著頭望著我，半晌才伸出手來說：“再見了，今天過的很愉快，來信呵！好好照顧自己。”他又拉拉我頭髮，一面笑一面走了」。

⑨（1871—1958、Georges Rouault）二十世紀初のフランスの野獸派画家である。

⑩ 原文は「我不站起來，你也請坐下。我拒絕聽你講話，你們不給我律師，我自己辯護，不經過這個程序，我不聽，我不走，我一輩子住在你們拘留所裡」。

（信州大学 全学教育機構 非常勤講師）

2011年12月20日受理 2012年2月6日採録決定